

# 生徒指導困難校における教師と生徒の信頼関係の構築に関する事例的研究

山本 宏幸\*・赤坂 真二\*\*  
(平成27年9月2日受付；平成27年11月2日受理)

## 要 旨

本研究では、生徒指導上の問題の対応が困難な状態の中学校にアクションリサーチの手法に基づいて介入し、教師と生徒の共同体験や教師からの承認経験などがもたらす教師と生徒の信頼関係の変容の過程を、定期的なアンケート調査を用いた分析をすることで明らかにしようとした。分析の結果、教師からの承認や活動への価値付け、そして期待の言葉を投げ掛け続ける温かな指導が教師と生徒の信頼関係を高める可能性が示唆された。また、アンケートと学級通信の内容の関連から、教師からの承認や活動への価値付けを継続して行うことで、教師と生徒の信頼関係が維持されていく可能性が示唆された。

## KEY WORDS

relationship between teachers and students 教師と生徒の人間関係, evaluation 教師からの価値付け, approval 承認感 special activities 特別活動

## 1 問題の所在と目的

文部科学省は「平成25年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」で、中学校における生徒指導上の諸問題について、暴力行為の発生件数40,246件（前年度 38,218件）、いじめの認知件数55,248件（前年度 63,634件）、不登校生徒数95,442件（前年度 91,446件）と報告している<sup>(1)</sup>。前年度と比較し、いじめの認知件数は減少したが、依然として中学校の生徒指導上の諸問題の発生件数は高いと言える。生徒指導上の諸問題について、群馬県の報告書を分析した調査によると「いじめは「5月～6月」と「10月～11月」に大きく増加することがわかります。」<sup>(2)</sup>と報告している。また、横浜市教育委員会の報告では、いじめや人間関係のトラブルの認知件数の多い月として4月と10、11月を挙げている<sup>(3)</sup>。これらのことから、生徒指導上の諸問題に対する継続した調査や調査結果を生徒指導に生かす、問題行動への予防的な対応の重要性があると考えられる。

文部科学省は「生徒指導提要」(2010)において、生徒指導を進める上で、教員と児童生徒の信頼関係の構築の重要性を指摘している。さらに、日ごろの人的な触れ合いと児童生徒と共に歩む教員の姿勢などを通じて信頼関係が構築されると言及している<sup>(4)</sup>。このことは、生徒指導上の問題行動の予防と解決において、教師と生徒の関係性が一つの要因として捉えられていることが分かる。

赤坂(2014)は学級における問題行動への教師の指導と学級への影響について、学級崩壊が起きるパターンを、「①一部の子どもが問題行動を起こす②教師が注意、叱責、放置（無視）を繰り返す③教師と問題行動を起こす子どもの関係性が悪化する④教師とその他の子どもの関係性も悪化する⑤学級の秩序が乱れ、崩壊する」<sup>(5)</sup>としている。また、加藤・大久保(2006)は、「問題行動の防止・解決には、問題行動をする生徒だけでなく、問題行動をしない一般生徒に対しても関わる必要性がある。」と述べている<sup>(6)</sup>。これらのことから、問題行動の予防と解決には、生徒全般に対しての教師と生徒の関係性と指導が必要であると言える。また、教師の問題行動への指導が、問題行動をする生徒にも一般生徒に対しても影響を及ぼす可能性があると考えられる。

教師の問題行動に対する指導行動が生徒に与える影響として、加藤・大久保(2009)は「困難校・学級では、指導がダブルスタンダード化するために、教師と一般生徒の関係性が悪くなり、その結果、一般生徒にまで反学的な生徒文化（学校・学級の雰囲気）が形成され、さらに荒れが悪化するというような悪循環が生じている。」ことを指摘している<sup>(7)</sup>。これらのことから、問題行動をする生徒に対する指導の在り方が、通常の生徒に対する教師との関係や信頼感に影響を及ぼすと考えられる。

では、教師と生徒の信頼関係を築くにはどうしていけばいいのだろうか。赤坂(前掲)は教師と子どもとの人間関

\*上越教育大学（専門職学位課程） \*\*学校教育学系

係づくりと学級づくりの関連について述べ、学習指導や生徒指導における教師と生徒の信頼関係の重要性について指摘し、「学級づくりは教師と子どもの人間関係から始まる」と述べている<sup>(8)</sup>。

教師と生徒の信頼関係については、中井・庄司(2009)が「過去の対人経験において、「教師からの受容経験」「教師からの承認経験」「教師との親密な関わり経験」を経験している類型の生徒が、その他の類型の生徒に比べ、教師に対する信頼感の得点が高い傾向にある。」ことを明らかにしている<sup>(9)</sup>。このことから、教師と生徒の人間関係の構築において、教師からの受容体験や承認経験や関わりの経験が教師の信頼を増すことが、教師と生徒の信頼関係を構築すると考えられる。また、土屋(2014)は「生徒の荒れや個々の困り感に対する支援介入策を友人関係や集団の中に見出し(見る)、教師が得た見方(分析する)で生徒と関わる(価値づける)ことで、生徒が安心して学級生活を送り、学習に対し意欲的に取り組む姿に変容していく」ことを明らかにしている<sup>(10)</sup>。このことから、生徒が安心して学校生活を送るために、教師の「見て、分析して、価値づける」かかわりは有効であると考えられる。

しかし、土屋(前掲)の研究では、「見て、分析して、価値づける」かかわりは「清掃、休み時間、授業内での見取りを短学活で価値づける」教師のかかわりを扱ったものであり、その他の場面でのかかわりについての教師と生徒の信頼関係の構築については、明らかにされていない。また、学級づくりにおける教師と生徒の関係の重要性について多くの実践書では述べられているが、定期的なアンケート調査を用いて、その変容を分析した先行研究は管見の限り見当たらない。

本研究では、生徒指導困難校に対するこれまでの研究や社会的背景、調査対象校の実態から、学級組織を支える教師と生徒の信頼関係構築のプロセスに焦点を当てる。特に、明確な目標を立てやすい学校行事を核にしたアクションリサーチの手法に基づいた介入を通し、教師からの「受容・承認・密接な関わり経験」や、「見て・分析して・価値づけるかかわり」を通して、教師と生徒の関係性を深めていくことで、教師の働きかけが生徒との信頼関係の構築に与える影響を分析することを目的とする。

## 2 方法

### 2.1 調査の対象

#### 2.1.1 学校・生徒の実態

A市B中学校1学年 1学年部職員

管理職へのインタビューから、研究対象校は生徒指導上の問題行動の発生状況や学級経営や授業中の指導に困難な状況がある、生徒指導困難校であると説明を受けた。職員構成の面では、熟練教師から若手教師まで、力量の差がある担任構成であり、生徒の対応や学級集団づくりの面で、クラス間の差が生じやすいという報告を受けた。学習面では、学習習慣が身に付いていない生徒や特別な支援を要する生徒も多く、教研式標準学力検査(NRT)、全国学力調査ともに平均値を下回り、基礎基本の定着が急務である。また、希薄な人間関係や未熟な社会性とともな様々な支援を要する生徒の増加により、学級経営が大変困難であると説明を受けた。

#### 2.1.2 調査対象学年生徒の実態

##### 2.1.2.1 学年主任の見取り

- ・男女の仲が良く、協力して活動することができるが、指示を出しても活動開始までに時間がかかったり、指導に対して反抗的な態度を取ったりする生徒がいる。
- ・学習面では、質問に対して反応が良く、発言や質問も多い反面、私語も多い。学力不振で、個別対応を必要とする生徒(特別な支援を要する生徒)も多い。

##### 2.1.2.2 院生の見取り

- ・話を聴く、ルールの徹底などの学級経営に必要な学級規律の機能が低下しており、指導が入りにくいこともある。
- ・学級によっては、人間関係が固定化しており、決まった友人でないと活動が成立しないことがある。
- ・学級によっては、係や当番活動の意識が低下しており、教師のサポートがないと成立しないことがある。

### 2.2 フィールドワークを行った時期

2014年7月1日～2014年11月27日

### 2.3 観察方法

アセスを4回実施・・・9月初旬・9月末・10月末・11月末

期間中の教師の働きかけと働きかけに対する生徒の様子をフィールドノーツに記録

1 学年部の生徒及び職員へのインタビューをフィールドノーツに記録

## 2.4 支援プランの概要

赤坂（2013）は、学級づくりについて、「目的を持たない群れ状態の子どもたちを目標のために役割分担が配置されたチームの状態に育てる営みである<sup>(11)</sup>。」と述べている。さらに、赤坂（前掲）は「行事などの共通の課題を解決していく過程を繰り返しながら、関係性の向上が図られていく。」と言及している<sup>(12)</sup>。また、高旗・倉田（1994）は、特別活動について「すべての過程が人間関係を深める指導の機会である。」と述べている<sup>(13)</sup>。これらのことから特別活動を人間関係づくりに活かす取組は有効であると言える。

校長、教頭、教務主任、生徒指導主事、研究主任、当該学年主任、当該学年部職員との面談を7月下旬に実施し、学年の実態を踏まえてアクションリサーチを展開することを確認した。人間関係づくりに研究の焦点を当て、日常的取組と行事を核にした取組を提案、共同計画、実践した。結果については、アンケートを元に教師と生徒の信頼関係の変容を継続して分析することを確認した。取組の具体的な手立ては以下の通りである。

### 2.4.1 行事を核にした取組

#### 2.4.1.1 振り返り活動（体育祭）【第1期】

全校生徒を対象に、体育祭強調週間に合わせて、体育祭練習における振り返り活動を行った。チームとしての成長・進歩、体育祭スローガンの実現、自分のがんばり、他者のがんばりの4点について振り返りシートに記入した。この活動により、自分がどのように集団や仲間に対して貢献できたかを確認したり、集団や自己の成長を確認したりできるようにした。また、記入された言葉を学級通信などで紹介することで、仲間だけでなく教師にも認められていることを知る手がかりとした。また、体育祭後には生徒のがんばりを讃えて、活動の価値や今後の成長を期待するメッセージを込めたスライドショーを全校集会で行い、生徒同士のメッセージ交換を実施する。

#### 2.4.1.2 リーダー会議（音楽祭リーダーミーティング）【第2期】

支援校において二大行事として生徒にとってモチベーションも高い音楽祭が10月下旬に実施されている。学級の合唱練習後に合唱のパートリーダー、指揮者、伴奏者、学級委員、音楽祭実行委員と担任がその日の練習の良かったことと今後の課題について話し合い、翌日の練習で学級に「今日の解決課題」として提示する取組（以下、リーダーミーティング）を提案した。

また、リーダーミーティングでの話し合いの促進のため、音楽科担当と共同で、合唱の完成度を高めることを目標にした視覚的な目標基準と日々の練習を振り返る目標設定シートを提案し、合唱成功の手がかりとする。また、それらを活用した教師を交えたリーダーミーティングを通して、学級のまとめや問題を担任教師と学級の生徒で解決していく雰囲気高める取組を行う。さらに音楽祭強調週間の合唱練習を振り返る音楽祭がんばりシートを用いて、自他の音楽祭におけるがんばりを認め合う取組を行う。

#### 2.4.1.3 「いじめ見逃しゼロスクール集会」での取組【第3期】

小中連携の一事業である、いじめの防止と小学校と中学校の円滑な接続を目標とした「いじめ見逃しゼロスクール集会」での話し合い活動と話し合い活動前のアイスブレイクを担当職員と共同で企画・運営し、人間関係づくりを促進する。話し合い活動については、クラス会議<sup>1)</sup>の要素を取り入れて、認め合う雰囲気の醸成を図る。

## 2.5 日常的取組

### 2.5.1 学級通信

生徒の日常生活での活躍などについて学級だよりを通じて紹介する取組の提案を行う。生徒の活動について教師から承認されたり、価値付けされたりする経験を通して、教師と生徒の関係性の向上を図る。

### 2.5.2 学年集会レクリエーション

一人一人の役割と活動での自分の居場所や貢献が感じられる、担任と生徒が協力して活動する学年レクリエーションを提案し、職員を含めた学年や学級集団を一つの共同体として感じるができる取組を行うことで、教師と生徒の関係性の向上を図る。

### 3 効果の測定材料

#### 3.1 学校環境適応感尺度「アセス」

生徒の対人関係を計測する量的データとして、栗原ら（2010）が開発したアセス<sup>(14)</sup>を使用する。アセスは学校適応感を測定する尺度であり、「生活満足感」、「学習適応感」、「対人適応（下位因子「教師サポート」、「友人サポート」、「非侵害的関係」、「向社会的スキル）」で構成される。「教師サポート」、「友人サポート」、「向社会的スキル」因子は互いに高い相関関係にある。

本研究では、教師と生徒の信頼関係の構築過程を調査するため、担任教師と生徒の関係性を測定する「教師サポート」と、「友人サポート」「非侵害的関係」「向社会的スキル」の4因子で構成される「対人適応」の尺度、及び「教師サポートを測定する質問項目」の生徒の変容を分析する。アセスは、9月初めから11月終わりまで、計4回の測定を実施した。学校支援の期間を学校行事との関連から、2学期（9月初旬から11月末）、9月初旬から9月末を第1期、9月末から10月末を第2期、10月末から11月末を第3期と設定し、各期の結果の分析を行う。

#### 3.2 エピソード分析

教師と生徒、生徒同士の人間関係の変容について学年部職員や生徒からの聞き取りや学級通信などの分析を行う。

## 4 結果と考察

### 4.1 結果と考察

#### 4.1.1 学校行事を核にした取組

調査期間の2学期に実施したアセスの対人的適応得点の分析結果である。中野ら（2012）が開発した「js-STAR」<sup>(15)</sup>を用いて、分散分析（一要因参加者内）を行った。

#### 4.1.2 2学期の変容（9月初から11月末）

表1 アセス対人的適応得点 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
対人的 適応得点	9月初	52.70	8.70	3.16 +
	11月末	53.74	9.70	

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

表2 対人的適応得点下位因子 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
教師 サポート	9月初	47.14	12.46	4.40 *
	11月末	48.92	12.62	
友人 サポート	9月初	55.11	13.29	0.13 ns
	11月末	55.49	14.70	
向社会的 スキル	9月初	50.16	10.73	3.04 +
	11月末	51.33	11.43	
非侵害的 関係	9月初	57.85	13.19	0.50 ns
	11月末	58.69	14.49	

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

2学期全体の変容を見てみると、対人的適応得点の上昇に有意傾向が見られた。下位因子では「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」「非侵害的関係」のすべての項目で上昇が見られたが、特に教師サポートが有意に上昇し、向社会的スキルの上昇に有意傾向が見られた。以下はアセスの教師サポートを構成する質問項目の分析を行った結果である。

表3 教師サポート質問項目 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
担任の先生は困った時に 助けてくれる	9月初	3.12	1.25	5.09 *
	11月末	3.31	1.20	
担任の先生は 信頼できる	9月初	3.16	1.32	1.70 ns
	11月末	3.27	1.25	



担任の先生はわたしのことをわかってくれている	9月初	3.15	1.18	4.21 *
	11月末	3.33	1.10	
担任の先生はわたしのいいところを認めてくれている	9月初	3.06	1.19	8.78 **
	11月末	3.31	1.19	
担任の先生は、わたしのことを気にしてくれている	9月初	3.02	1.11	1.12 ns
	11月末	3.12	1.11	

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

いずれの項目も数値の上昇が見られた。特に「担任の先生は困った時に助けてくれる」、「担任の先生はわたしのことをわかってくれる」、「担任の先生はわたしのいいところを認めてくれる」の3項目については有意に上昇した。

教師と生徒の信頼関係と行事における教師と生徒の共同について学年部職員は次のように語っている。インタビュー対象者は1学年部の副任である。全学級に関わる機会の多い職員としてインタビューを行った。

11月18日 フィールドノーツより

- ・どのクラスも担任と仲が良く、何かあった時に言ってくれる。
- ・特に関係ができてきている子から生徒指導に関する情報が上がってくる。
- ・行事に関してはリーダーになれる子が少ない感覚があり、担任が余計に中に入って指導されていくことが多いと思う。
- ・先生に相談してくることも多いと思います。

(下線は筆者が加筆。以下、同様。)

インタビューからは、2学期に行われた行事での担任とリーダー生徒の協力の様子や教師と生徒との信頼感の高まりを見ることができる。また、学年主任に教師と生徒の関係について、インタビューを実施した。

12月26日 フィールドノーツより

- ・まあ、いろいろあったけど担任の先生たちは本当に一生懸命やってくれている。Eさん(担任E)なんて、〇〇と〇〇が同じクラスにいるわけだ。トラブル起きることをあらかじめ予測して、そのために事前に保護者会開いたからな。「必ず成長するはずですよ」と「全員の成長のために力を貸してください。」と。言うわけだ。すごいわね。トラブルが起きた時も何回も何回も学級での話し合いをしているしな。他(のクラス)もそうだけど、学級の中での生徒同士の理解は確実に高まったと思うよ。
- ・〇〇だって、ちゃんとFさん(F教諭)の指導聞くねかね。普段あれだけ悪態ついたって、ちゃんと信頼してるんだよ。1月23日インタビュー実施
- ・2学期で担任の先生方への信頼感が高まったのはまちがいないな。まあ、行事がそのきっかけの一つだと思う。でも、一番大切なのは毎日の積み重ねだわね。学級だよりで紹介されるのもそうだけど、何か起きたその瞬間、先生たちがすぐにほめたり、意味付けしてくれる。その日常が一番大切だと思うよ。担任と生徒の関係を心配する人がいても、放課後見てみりゃ、いつも話しているしな。生徒も困ったらまず担任のとこに相談に行くからな。

(( )は筆者が加筆。以下同様。)

学年主任のインタビューからは、2学期における教師と生徒の信頼感の高まりを実感している様子が見られる。また、教師と生徒の信頼感の高まりのきっかけとして、「行事や学級だよりでの生徒への活動への意味付けが影響している。」と考えている様子が見られる。同時に「日常における生徒指導上の問題解決や言葉掛け、称賛の影響が行事以上に大きな意味を持っている。」と感じている様子が見られる。

これらのことから、「教師サポート」上昇と行事との関連性については、行事を通しての生徒のがんばりを活動場面における声かけ、学級だよりなどで評価されたことが影響を与えた可能性が示唆される。さらに、教師と生徒が協力して目標を達成したり、問題を解決したりしていく共同体験が「教師サポート」の上昇と関連があると考えられる。

また、2学期の変容から、行事における認め合い活動を通じて、教師からの称賛や生徒の貢献への価値付けがなされることで、「教師サポート」が上昇し、高い相関がある「友人サポート」と「向社会的スキル」の適応感を高めたことが「対人適応」の高まりにつながったと推測する。

#### 4.1.3 第1期(9月初から9月末)

表4 アセス対人的適応得点 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
対人的 適応得点	9月初	52.69	8.70	0.17 ns
	9月末	52.93	9.50	

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

表5 対人的適応得点下位因子 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
教師サポート	9月初	47.14	12.46	0.07
	9月末	46.96	12.35	ns
友人サポート	9月初	55.11	13.29	0.61
	9月末	54.41	13.58	ns
向社会的スキル	9月初	50.16	10.73	0.32
	9月末	50.58	11.06	ns
非侵害的関係	9月初	57.85	13.19	1.57
	9月末	59.26	14.88	ns

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

すべての項目において有意差は見られなかったが、向社会的スキルと非侵害的関係において上昇が見られた。以下は、1年部担任職員のインタビュー内容である。

11月25日 フィールドノーツより

(担任A教諭)

・2学期は生徒同士をつなげる活動(体育祭がんばりシートなど)を実施したことで、生徒同士のかかわりの時間が増えた。

(担任B教諭)

・生徒同士をつなげる活動が「普通なこと」として生徒の中に浸透した。言葉を「話す」「書く」力がついたように感じる。

・行事でのまとまりは、人に言ったり、言われたりの関係が行事の中でたくさんあって、お互いの共通理解ができてきた。

(担任C教諭)

・大変な子の授業態度が良くなった。人間関係の作り方が良くなった。

以下は、生徒の体育祭振り返りシートのコメントである。

9月16日 フィールドノーツより

・体育祭が終わった後、「おつかれさま!」「すごかったよ!」など、声をたくさんかけていた。

・周りの人のおかげで、いつもより努力ができたこと。

・体育祭を通じて、みんなのことも考えられるようになった。

・みんなのためになることは、自分で見つけて実行したところ。

職員インタビューや生徒のコメントから、生徒同士の関わりが増えたこと、気持ちの伝え方の変化などが感想として上がった。教師サポートについては、大きな変化は見られないが、体育祭の活動の様子やがんばりシートのコメントについて学級通信で紹介するなど、体育祭を通じて生徒の活動に対する教師からの肯定的な評価が多くなされた。

9月19日 A組学級通信より抜粋

(前半省略)結果はどれも2位でした。ですが、その結果よりも練習の中での皆さんの変化の方が重要に思います。

毎日のように、仲間のがんばりや軍の成長を書き込んだカードも文字がいっぱいになっていました。それだけ一人一人の心が大人になったということです。

体育祭前日、翌日の天気予報が悪いことを知り、朝、○組のみんながてるてるぼうずをつくってくれました。誰か一人が作るのではなく、全員が自主的に作っていることに私は驚きました。ティッシュと輪ゴムを持ってきてくれた人がいて、その人が声をかけてくれたのだと思います。本当にありがとう。また、その日の昼休み、3人4脚の練習をしたい人は外に来ればできるよ、と声をかけると、何人も練習をしに来る姿がありました。私はその姿を見て、すでに「体育祭は成功するな。」と思いました。

数値の変容とインタビュー結果から、「向社会的スキル」と「非侵害的関係」の上昇を分析すると、体育祭がんばりカードなどを通じて生徒同士の肯定的な交流場面が増え、互いの良さを正しく伝え合う機会が増加し、相手の気持ちになって考えたり、傷つけられないという感覚が得られたりした可能性があることが示唆される。

#### 4.1.4 第2期(9月末から10月末)

表6 アセス対人的適応得点 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
対人的適応得点	9月末	53.93	9.50	4.60
	10月末	54.21	10.38	*

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

表7 対人的適応得点下位因子 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
教師サポート	9月末	46.96	12.35	4.24 *
	10月末	48.62	13.58	
友人サポート	9月末	54.41	13.58	4.25 *
	10月末	56.52	15.11	
向社会的スキル	9月末	50.58	11.06	5.71 *
	10月末	52.20	12.04	
非侵害的関係	9月末	59.26	14.88	0.01 ns
	10月末	59.38	14.76	

+p&lt;.10 \*p&lt;.05\*\* p&lt;.01

対人的適応得点が有意に上昇した。また、下位因子の教師サポート、友人サポート、向社会的スキルについても有意に上昇した。以下は、担任のインタビュー内容である。

11月4日 フィールドノートより

## A教諭

- ・リーダーの不満や全体では言えない相談を密に行ったことで、生徒との距離が一気に縮まったと感じる。
- ・音楽祭では、特に放課後に生徒と話すことがたくさんあった。リーダーと色々な相談をすることで、翌日の目標を明確にすることができた。

## D教諭

- ・リーダーも自信をもって全体に伝え、クラスの問題として扱うことができた。

結果からは、音楽祭に向けたリーダーミーティングでのリーダー生徒との関係性の向上やリーダー生徒が自信をもって話し合われた内容を学級に伝えることができた様子が予想される。

表8 教師サポート質問項目 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
担任の先生は困った時に助けてくれる	9月末	3.12	1.28	3.31 +
	10月末	3.28	1.30	
担任の先生は信頼できる	9月末	3.12	1.30	3.92 *
	10月末	3.28	1.31	
担任の先生はわたしのことをわかってきている	9月末	3.03	1.24	6.87 **
	10月末	3.23	1.21	
担任の先生はわたしのいいところを認めてきている	9月末	3.16	1.23	0.26 ns
	10月末	3.21	1.20	
担任の先生は、わたしのことを気にしてくれている	9月末	2.95	1.14	2.26 ns
	10月末	3.05	1.16	

+p&lt;.10 \*p&lt;.05\*\* p&lt;.01

質問項目ごとの分析結果からは、「困った時に助けてくれる」が有意傾向、「信頼出来る」「わたしのことをわかってきている」という担任に対する質問項目が有意に上昇した。問題解決を通しての教師への信頼感の高まりや、自分の努力を認められているという実感が得られるようになったと予想される。

11月4日 フィールドノートより

- ・練習している時にトラブルが起こったときもあったが、どんどんクラスが団結していったので、銅賞だったけどよかった。
- ・「並んで！」と、声をかけ合っていた。1つになろうとしていたと思う。
- ・前ふざけていた人が注意している人にならなくなっていった。
- ・みんなに指示することが出来るようになったけど、もっとちゃんと注意しとけば良かった。
- ・自分だけじゃなくて、人のことも考えて行動できるようになった。
- ・自分がどうすれば全体が良くなるか、周りを見て行動したり時間を見て行動したりする事が成長したと思う。

音楽祭後の振り返りシートからは、行事の成功途中での問題を学級として解決していく中で、学級としてのまとまり感や目標への達成感が得られた様子が見られる。

人間関係づくりと課題解決の関連について赤坂（前掲）は、「学級づくりにおいては人間関係づくりを目的化してはならない。その上に成り立つ課題解決集団の育成を目指すべきである。」と述べている<sup>(16)</sup>。体育祭でのリーダーの活躍や全員で一つのことに取り組むことの楽しさを実感し、音楽祭に向けての活動にも意欲的に取り組むことができたと考えられる。音楽祭リーダーミーティング、がんばりシートでの相互評価や教師からの活動への肯定的な価値付けなどを通して、他者と上手に関わることへの意識が高まったと考えられる。

また、音楽祭は学級単位での取組が多く、目標設定や問題解決が学級内で行われる。音楽祭の成功という課題の解決のために、教師と生徒による共同の取組を促進し、目標や問題についての話し合いや問題解決する上で、教師のサポートが十分になされたことが教師サポートの上昇につながった可能性が示唆される。

#### 4.1.5 第3期（10月末から11月末）

表9 アセス対人的適応得点 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
対人的 適応得点	10月末	54.21	10.38	0.64
	11月末	53.74	9.70	ns

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

表10 対人的適応得点下位因子 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
教師 サポート	10月末	48.62	13.58	0.15
	11月末	48.92	12.62	ns
友人 サポート	10月末	56.52	15.11	0.91
	11月末	55.49	14.70	ns
向社会的 スキル	10月末	52.20	12.04	1.21
	11月末	51.33	11.43	ns
非侵害的 関係	10月末	59.38	14.76	0.45
	11月末	58.69	14.49	ns

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

教師サポート以外は平均値で下降が見られた。また、すべての項目に有意差は見られなかった。

表11 教師サポート質問項目 分散分析 N=170

項目	時期	平均値	標準偏差	F比
担任の先生は困った時に 助けてくれる	10月末	3.28	1.30	0.18
	11月末	3.31	1.20	ns
担任の先生は 信頼できる	10月末	3.28	1.31	0.01
	11月末	3.27	1.25	ns
担任の先生はわたしのこと をわかってくれている	10月末	3.23	1.21	1.90
	11月末	3.33	1.10	ns
担任の先生はわたしのいい ところを認めてくれている	10月末	3.21	1.20	1.76
	11月末	3.31	1.19	ns
担任の先生は、わたしのこ とを気にしてくれている	10月末	3.05	1.16	0.85
	11月末	3.12	1.11	ns

+p<.10 \*p<.05\*\* p<.01

質問項目ごとの分析では、4項目で平均値での上昇は見られたが、有意傾向は見られなかった。「わたしのことをわかってくれる」「いいところを認めてくれている」「わたしのことを気にしてくれている」に上昇が見られた。

11月27日に実施された「いじめ見逃しゼロスクール集会」に向けて、中学校生活の紹介に各学級で取り組んだ。時期的な問題もあり、教師主導での活動であったが、教師の提案に生徒もよく応えていた様子を見取ることができた。

小学生を交えた話し合い活動では、同じグループの全員の意見を大事にするために、クラス会議の要素を取り入れた。「聞いていることを態度で表す」「やさしく言う」「人の意見をむやみに否定しない」という話し合いの目標を実現しようとする姿が見られた。また、各担任が提案する中学校の紹介をクラス単位で企画し、小学生に発表する活動も行われた。教師と生徒が協力して課題解決していく姿が見られた。話し合い活動の様子と学級ごとの中学校生活の紹介の様子について学年主任にインタビューを行った。

12月26日 フィールドノートより

- ・どの生徒も自分の役割を一生懸命に果たそうと努力していた。
- ・小学生に伝えたいことを、中学校の紹介は提案する際にスケジュールの関係で、担任の意見が全面に出た内容になったが、生徒はその思いによく応えてくれた。
- ・やっぱり小学生のためにがんばろうとか、なんとか担任の考えた内容を成功させようという気持ちが大きかったんじゃないかな。情だな。

小学生に対して熱心に受け答え、担任の思いに答えようとする生徒の成長を喜ぶ姿が見られる。先生の思いに答えようとする姿を実感している点から、教師と生徒の人間関係の高まりを感じている様子が見られる。

2学期間の変容のアセスの結果、及び学年主任のアンケートから推察すると、第3期においては、これまでの日常



活動や行事を通して教師との信頼関係が深まり、安定した教師と生徒の関係性の構築がなされたと考える。

## 4.2 日常活動の取組

### 4.2.1 学級通信

以下は抽出クラスA組の学級通信の内容である。

A組 学級通信より抜粋
9月2日 ・日程係の〇〇さん。夏休み明けでしたが、自分の役割をしっかりと果たしてくれました。日程係さんのおかげでみんなに時間割が伝わる。教科係も連絡がきちんできてる。ありがとう。
9月3日 ・英語の授業でなかなか着席できなかった仲間に対して、〇〇さんが「おい、早く座ろうぜ。」と声をかけてくれたりという話をききました。 ・〇〇さん、日直として台拭きをしっかりとしてくれました。おかげできれいな机で給食が食べられます。
9月4日 ・授業後の黒板消しを〇〇さんと〇〇さんが一生懸命にしてくれました。教室や黒板がきれいに整美されていると授業にも集中できるし、授業担任の先生方もみんなもさわやかな気持ちで授業が受けられると思います。係活動がしっかりなされているとクラスもみんなの手で動いていることが実感できるとおもいます。ありがとう。

学級通信を通じて、生徒一人一人の学級におけるがんばりや学級への貢献の記入がなされている。アセスにおける「教師サポートの変容」（1回目28, 2回目35, 3回目45, 4回目45）が大きく見られ、学級通信に個人名を挙げられて紹介された生徒Aにインタビューを実施した。

11月19日 フィールドノートより
学級だよりで、自分の名前が出されるとはうれしいけど、家の人にも見せられるし。最初は便りに載ることを意識していたけど、なんだか係活動することが当たり前になったかも。

当該生徒は自分の学級での役割が教師から肯定的に評価され、学級通信などの媒体を通して他者に伝わることに喜びを感じている。学級通信に掲載されることや教師からの肯定的な評価が、結果として係活動をすることが日常化したための強化材料となっていることが考えられる。また、教師からの承認感が醸成されていったことが考えられる。

さらに、学級で配布される学級通信には、担任が生徒の活動をどのように紹介されているのか、学級通信の分析を実施した。抽出クラスB組の学級通信の内容・記事を記事ごとにカテゴリー分けし、表12のように分類した。

表12 学級通信の内容カテゴリー

番号	記事の分類	表記
1	実現してほしい姿・目標、教師の思い・願いなどの記述	目標・願い
2	学級の実態・出来事に関する記述	実態
3	来週の予定、日程連絡、提出物などに関する連絡の記述	予定
4	生徒個人への称賛、承認の記述	個人称賛承認
5	生徒個人の活動・行動・貢献への価値付けの記述	個人貢献
6	グループ、リーダーへの称賛、承認への記述	個別称賛承認
7	グループ、リーダーの活動・行動・貢献への価値付けの記述	個別貢献
8	学級全体への称賛、承認への記述	学級称賛承認
9	学級全体の活動・行動・貢献への価値付けの記述	学級貢献
10	注意・指導に関する記述	注意・指導
11	その他	その他

9月から11月までの学級通信の内容をカテゴリー毎に分類して、第1期から第3期に分けて分析を行った。

表13はその分析結果である。

表13 学級通信の内容の変容

表記	第1期	第2期	第3期
発行部数	5回	5回	4回
目標・願い	18	15	8
実態	12	14	6
予定	8	5	6
個人称賛承認	46	35	2
個人貢献	5	30	1
個別称賛承認	4	4	2
個別貢献	1	2	2

学級称賛承認	11	20	7
学級貢献	3	2	1
注意・指導	0	2	4
その他	1	1	1

第1期では、体育祭についての「教師の願い」が多く語られていた。また、体育祭、家庭学習、係活動の様子について多く称賛している様子が見られる。第2期では、音楽祭、学級の雰囲気についての「教師の願い」が多く語られていた。また、音楽祭は学級単位の活動のため、音楽祭に向けた練習の様子や学級全体を励ましたり、称賛したりする内容が多く見られた。

第2期には個人の行動の「他者への貢献」に関する記述やエピソード紹介が多くなった。特に、音楽祭練習のリーダーの学級に対する貢献や生徒一人一人の係活動などが学級全体に及ぼす貢献などの語りが多くなされた。このことは、9月末の学級通信発行前の点検で、学年主任から「係活動への義務感だけでなく、人に尽くす喜び、人のためになる自分の存在意義、そして自分も他人様からの施しのおかげで生きていることを教えてあげてください。」と指導を受けたことに対する教師の学級通信の記述に変容が起きたことが要因だと思われる。

第3期では、テスト期間ということもあり、学習に対する指導や教師の願い、学習面での学級全体への称賛の内容が多かった。また、「いじめ見逃しゼロスクール集会」での学級生徒の成長などが語られていた。また、2学期を通して、個人名が出されて称賛をされたり、学級に貢献している姿を語られたりしているケースが98事例あった。アセスの第3期は、教師サポートの数値の上昇及び友人サポート、向社会的スキル、非侵害的関係の数値に有意差は見られないものの下降している。これらの結果と学級通信の記述の分析を関連させて考えると、行事期を終え、生徒同士が認め合う場や教師からの承認経験や価値の語りが増減したことが、対人適応感を低下させた可能性が示唆される。

第1期、第2期における学級通信の内容は、行事や係活動に関連する教師からの称賛や価値付けが多くなされていると言える。アセスの数値的変容と関連して分析すると、アセスの「教師サポート」が第2期に5%水準で1.66ポイント有意に上昇したことから、これらの教師からの肯定的な評価が、「教師サポート」を構成する質問項目の「担任の先生はわたしのいいところを認めてくれている」の数値を上昇させ、結果として「教師サポート」上昇の一要因となったことが考えられる。

また、アセスの2学期全体の変容を見てみると、2学期全体の対人的適応得点が1.07ポイント上昇し、有意傾向が見られる。下位因子を見てみると、教師サポートが5%水準で1.78ポイント有意に上昇、向社会的スキルは1.17ポイントの上昇に有意傾向が見られた。教師サポートの質問項目では、「担任の先生は困った時に助けてくれる」、「担任の先生はわたしのことをわかってくれる」、「担任の先生はわたしのいいところを認めてくれる」の各項目が有意に上昇している。アセスの変容と2学期全体を通しての学級通信の記述と関連を踏まえると、教師からの承認や活動への価値付けが学級通信を中心とした媒体で紹介、共有されたことが教師サポートの上昇につながったと予想される。また、有意に上昇した教師サポートと上昇に有意傾向が見られた向社会的スキルの関連を考えると、教師サポートを上昇させた生徒が友人とかかわることへの意識を高め、向社会的スキルの数値を上昇させた可能性が考えられる。結果として、2学期間における対人的適応得点の上昇につながった可能性が示唆される。

#### 4.2.2 学年集会レクリエーション

「教師と生徒が協力して取り組む学年レクリエーション」の提案を受け、担当職員及び学年のリーダー生徒の企画・運営によるレクリエーションが数回実施された。第1期では、体育祭での学級対抗リレー走順決め、第2期では、音楽祭の発表順決めについて、それぞれの学級担任と生徒が協力して他の学級と競うレクリエーションが企画された。

以下は生徒の数名のインタビューである。

9月3日 フィールドノーツより

・先生たちとあいこジャンケンをして、あいこの数が多くなるように、出すのを決めたりするのが楽しかった。

10月8日 生徒インタビュー

・連想ゲームで先生が想像した言葉を予想するのがとても楽しかった。

・先生が連想ゲームで、うちらが当てたのをすごく嬉しそうで良かった。

レクリエーションを実施したことで、担任と生徒の共同体験が学級のまとまりを生んだと感じている様子が見られる。生徒のインタビューからも、教師と生徒の良好な関係性について意識してコメントしている様子が見られる。

## 5 全体考察

本研究では、2学期における学校行事の成功や人間関係づくりを目標にした活動過程において、教師からの「受容・承認・密接な関わり経験」や、「見て・分析して・価値づけるかかわり」が、教師から「認められている」という感覚を高め、「教師サポート」を上昇させた一要因となった可能性が示唆される。

また、対人適応得点と学級通信の変容の関連性の分析からは、行事期における生徒同士の認め合い活動が対人適応得点の上昇に有効である可能性が示唆されるとともに、対人適応得点を下降させないためには、行事期を終えても授業や日常の活動を十分に見取り、生徒を称賛し、活動への価値付けを継続的に行う手立ての必要性が考えられる。日常場面で、教師と生徒のレクリエーション等の共同体験や、学級通信やその場での教師からの適切な称賛や承認、価値付けを継続して行うことが教師と生徒の良好な人間関係の構築において有効であることが示唆された。

さらに、教師サポートを上昇させることが、生徒が友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルを持っていると感じる向社会的スキルの数値を上昇させ、関連する対人的適応得点を上昇させた結果からは、教師との信頼関係の構築が、結果として生徒同士の関係性に影響を及ぼし、学校生活を充実して送る一要因としての可能性となることが示唆された。これらのことから、学級づくりにおける、教師と生徒の信頼関係の重要性を導きだす結果となった。

## 6 今後の課題

### 6.1 授業における信頼関係の構築について

今回はアセスの「学習サポート」の変容については調査の対象外としている。しかし、教師の授業中におけるかかわり方が信頼関係の構築に影響すると考えられる。授業中の教師の指導行動について分析と教師サポートの変容との関連についての調査が必要である。

### 6.2 年間を通じた変容について

本研究ではアセスの変容を2学期間のみ測定した。学年主任は「1学期にも宿泊体験などの大きな行事があり、教師と生徒の関係性を語る上では1学期の影響も大きい。」と語っていた。教師と生徒の良好な関係を語る上で、1学期における学級の状態と指導の影響について年間を通じて継続的に分析する必要があると考える。

### 6.3 生徒指導上の問題解決と信頼関係の関係

当該学年主任のインタビューからは、「生徒の活動、行動直後の教師による価値付けや生徒指導上の問題解決が教師と生徒の信頼関係に影響している。」と読み取れる。支援校で教師と生徒の良好な関係を構築する上で、大きな要因と考えられる生徒の活動、行動直後の教師の価値付けの行動分析や生徒指導上の問題解決という側面からも分析する必要があると考える。

## 脚注

注1 クラス会議：赤坂（2014）によると、クラス会議は「アドラー心理学の考えを基に、子どもに社会で生きるために必要なスキルと態度を教え、クラスを教育共同体に育てるアプローチ」と説明している。詳しくは参考文献<sup>1)</sup>を参照。

## 引用文献

- (1) 文部科学省：「平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/16/1351936\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/16/1351936_01_1.pdf)（2015年1月21日閲覧）
- (2) NPO法人ストップいじめ！ナビ：「ストップいじめ！ナビーいじめを止めたい大人たちへ」<http://stopijime.jp/data>  
（2015年8月14日閲覧）
- (3) 横浜市教育委員会事務局：「こども青少年・教育委員会資料ーいじめ解決一斉キャンペーン」の実施結果について  
<http://www.city.yokohama.lg.jp/shikai/pdf/siryo/j4-20130315-ky-32.pdf>（2015年8月14日閲覧）
- (4) 文部科学省：『生徒指導提要』，教育図書，2010
- (5) 赤坂真二：「目立つ静かな荒れ」，新潟日報，（2014年10月18日閲覧）

- (6) 加藤弘道・大久保智生：「問題行動をする生徒および学校生活に対する生徒の評価と学級の荒れとの関係」, 教育心理学研究, 第54集, pp.34-44, 2006
- (7) 加藤弘道・大久保智生：「学校の荒れの収束過程と生徒指導の変化—二者関係から三者関係に基づく指導へ—」, 教育心理学研究, 第57集, pp.466-477, 2009
- (8) 前掲 (3)
- (9) 中井・庄司：「中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連」, 教育心理学研究, 第57集, pp49-61, 2009
- (10) 土屋崇範：「安心して学ぶことができる集団づくりにむけた教師の働きかけ—関係性に着目した教師視点の変容と定着—」, 「静岡大学教育実践高度化専攻成果報告書抄録集」第4集, pp.79-84, 2014
- (11) 赤坂真二：『スペシャリスト直伝！学級を最高のチームにする極意』, 明治図書, 2013
- (12) 前掲 (9)
- (13) 高旗正人・倉田侃司：『教職専門シリーズ⑦特別活動』, ミネルヴァ書房, 1994
- (14) 栗原慎二・井上 弥：『アセスの使い方・活かし方』, 本の森出版, 2010
- (15) 中野博幸・田中 敏：『フリーソフトjs-STARでかんたん統計データ分析』, 株式会社技術評論社, 2012
- (16) 前掲 (8)

### 参考文献

- 1) 赤坂真二：『赤坂版「クラス会議」完全マニュアル 人とつながって生きる子どもを育てる』, ほんの森出版, (2014)



# A case study of structure of teachers and students in a school with difficulty in student guidance

Hiroyuki YAMAMOTO\* · Shinji AKASAKA\*\*

## ABSTRACT

In this study, we intervened in a junior high school that showed difficulty in correspondences of student guidance using a method of action research. We tried to clarify the process of change in relationship between teachers and students that is brought by common experiences and approval experience from teachers using regular survey. From the results of the analysis, it was suggested that approval, evaluation of activities and students guidance with warm words including expectations from teachers may improve relationship between teachers and students. In addition, it was suggested that, if the above activities are done continuously, they promote better relationship between teachers and students.

---

\* Joetsu University of Education (Professional Degree Program) \*\* School Education